

4名の基調報告からは、「信頼学」の広がりを感じた。コネクティビティあるいは信頼は、個人であれ集団であれ社会であれ、人間を分析するときについてまわる関係構築の動態を、マクロでもミクロでも、包摂しつつ封じ込めない鍵概念として、機能していたように思う。特に、鈴木啓之氏による、「信頼には賭けという側面がある」という指摘が重要だと考えた。この点には、イスラーム信頼学ブログにおいて黒木英充氏も同様に言及していたが、もう少し言葉を増やして考えてみれば、この賭けは「自己存在の持続を他者に委ねること」と表現できるのではないか。ところで、不信や分断という表象を頻繁に目にすることもあって、日常的に実践している信頼が、現代社会ではとかく忘却される。例えば、我々は居酒屋で次々と出てくる料理や飲み物をいちいち毒味してなどいられない。当日の懇親会でも、私は隣のテーブルからもらった料理をごく自然に口にした。支払いの際に紙幣を受け取る店員も、いちいち偽札であるかの吟味はしないだろう。このように、身体における無意識の代謝作用や呼吸のように、信頼はそれを実践していると意識していないときの方がスムーズに機能するという点は否定しがたいと思われる。ただ一方で、それを意識しつつ、すなわち、賭けの側面を承知の上で、信頼する場面があることも確かである。多くの重大な決断はこちら側であろう。とすれば、自己の存続を他者へ委ねるといった営為を分野横断的に研究する作業は、過去や現在を不断に参照しつつ未来を志向する学問がもつ、社会にポジティブな効果をもたらす可能性を、まさに体現しているといえよう。

全体討論での辻信一氏のコメントは、示唆に富んでいた。特に、「あいだ」は領域であり、同時に関係性でもあるという指摘は目から鱗であった。氏の言葉を借りれば、それは「地図上には描けない広がり」である。その「あいだ」を破壊する「壁」には両面があるとの話も面白かった。氏はパレスチナとイスラエルを訪れた際、パレスチナ側から見た壁はグラフィティにあふれて心躍ったが、イスラエル側には何も描かれておらず、街中もグローバルで楽しくなかったという。インターナショナルではなく、グローバルと表現してしまうと、あいだがなくなってしまうという指摘もあったが、別様に言えば、違いはただちに隔たりを意味せず、面白みの根にもなりうるということなのだろう。そして、そうした面白みは、各人のネガティブ・ケイパビリティに支えられるのかもしれない。私はこの点をアミン・マアルーフ氏の『アイデンティティは人を殺す』と結びつけて考えてみたいと思った。

私自身が発表者として参加したポスターセッションは、さまざまなテーマが入り混じった豊かな学术交流の場であった。実際に会場を逍遥しながら、個々の発表に聞き入る人々の様子だけでも、充実感をもたらした。ただ、単にテーマが多様だったというのみではなく、同時に、特定の方にじっくり聞いてもらって色々指摘してもらおうという利点もポスター発表にはあるように感じた。ひとつ残念だったのは、コアタイムの時間の短さである。どの程度の時間幅で実施するか、どのような配置・発表形態にするかは、大変に難しい問題であるとは思いますが、とても25分では吸収しきれないほど混沌としていたように思う。

シビルダイアログキャラバンの展示は、新しく、かつ重要な活動であると思った。そもそも、保育施設で実施したというのが驚きだった。なぜ、まず保育施設なのかの説明が（見逃したあるいは聞き逃したのかもしれないが）、欲しいとは思った。小中高生や大学生、企業人やその他一般の人々との関わりあいも同様に重要であろう。それを考えるうえで、個人的には、今回のポスターセッションのあり方がヒントになるのではないかと思った。というのも、会場での参加者の様子が、美術館で作品を見てまわる人々に酷似していたからである。大学の敷地内に限らず、東京都美術館や国立新美術館のような、比較的小さな公募展もさまざま行なっている施設で、何らかの企画ができるのではないだろうか。

最後に、全体集会を運営したイスラーム信頼学プロジェクトに携わる全ての方々に、深く感謝申し上げます。今後の活動・企画も楽しみにしています。

